
思い描くあの頃へ

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い描くあの頃へ

【Zコード】

Z0040B

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

主人公アルスとミルハープは同じ村に住む幼馴染だった。しかし、アルスは六歳の時に父を越える剣士を目指すために大陸を越えて武術学校へ入学する。ミルハープとある約束を交わして。それから十年の月日が経ち、ミルハープはいつもと変わらぬ日々を送っていたが、ある人物との出会いで流されるままの人生に新たな風を送り込むことを決意する。

第0話

第0話

遠く離れた人に
想いはちゃんと届くのだろうか。
少女は時々そう思ひ。

離れていても

少年は少女のことを忘れずにいるだろうか。
少年の心には、今も少女の姿があるのだろうか。

今まで日常だったものが急に日常じゃなくなつたと
少女は少年の重みに築く。

自分の気持ちは今もここにある。
一生変わることのない想い。

でも、彼は？

彼の気持ちは
今もちゃんと彼の中で再び出来事を待つていてのだろうか。
彼の想いはずっと……

第1話

「よお～し、今日はここまで！」

体格のよい中年男が熊みたいて大きな両手を叩いて授業の終了を知らせる。

全員が体格のよい中年男の前に集合し、きちんと整列する。

「前に習え！」

全員が一斉に両腕を体の前にピシッと伸ばす。

「直れ！」

全員が一斉に伸ばした両腕を下ろす。そのスピードは人のよつてまちまちでめんどくさそうにだらだらと下ろす者もいれば、最後までちゃんと下ろす者もいる。どうして下ろすときだけいつも差が出るんだろう、とアルスはしばしば思っている。そういう彼の腕の下ろし方は日によって違うが、今日は後者である。よほど疲れているときはこんなところまで集中力は持たない。

「先週から言つてることだが明日は、この間の組分けチームで対抗試合をやる！皆、きちんと体のコンディションを整えておけよ！大事な場面での体調管理は剣士だけでなく、全ての職業の基本だからな！」

中年男は手も熊みたいに大きければ声も熊の咆哮のよつて野太い。しかもいつも大声である。聞こえないはずはないのだが、それでも中には聞こえないフリをする者がいる。そういう相手に、この熊……ではなくて中年男は顔に似合わぬ愛の折檻をする。

中年男曰く、教育者として愛の折檻は大事な生徒との「ミミコニケー

ショーンらしい。よくわからないが。大の男が『愛の』なんて氣色悪いこと言つなよと言いたくなるときがある。

「うんたらかんたらなんたらかんたら……それでは解散！」

授業最後の長い話が終わり、生徒達はげんなりとしながら宿舎へと帰つていく。アルスもその波に乗つて帰らつかと思つてはいるが、一羽の鳥がアルスの肩口がけて降りてきた。

「よう、エスパー。元気にしてたか？」

アルスはそう言つて白い鳩の頭を指先でちょんちょんと撫でぐ。エスパーと呼ばれた鳩は気持ちよさそうに鳴いた。

「いつもありがとな」

アルスはエスパーの両足にしつかり握られている手紙を優しく取ると、歩きながら文面を開いた。

「アル君へ。元気にしていますか？私はもちろん元気です。モアも相変わらず毎日元気に村の中を走っています」

彼女の手紙の書き出しはいつもこの一文だった。

「アルス！」

「うわっと！」

背中を叩かれ、アルスは前のめりになる。エスパーも異常を感じて空中に飛び去つてしまつ。

「お、いつもの手紙を読んでいたのか。毎月必ず送つてくるよな」先ほどアルスを叩いたこの少年はゲイルと言つて、アルスがここで剣を学ぶようになつたときからの友人だ。アルスと同じく六歳からここに来たゲイルは同じ学び友達というよりは、腐れ縁の幼なじみといった感じである。

「いつもの幼なじみの娘か？」

「ああ」とアルスは頷く。

「いいよなあ、毎月こんなに心配してくれて」

ゲイルは「しかも女の子に」と強調するようにぼやいた。

「あいつと俺は、決してゲイルが思つてはいるような関係じやないぞ」

「そうなのか？それはちょっと問題なんじやないのかアルス君よお

？」

「何で？」

「せつかく身近に女の子がいるんだ。お前は俺が守つてやるみたいなことでも手紙に書いてハートをゲットしちゃえよ。じゃなきゃその娘、他の男に取られちまうぜ！」

「あいつは物かよ

「ありえない話じゃないだろ？」

小さなため息をつきアルスは口を閉じた。ふと、空を見上げると大きな太陽がオレンジに空を染めながら一寸の終わりを告げようとしていた。

（あいつは今頃どうしているのかな…）

第2話

第2話

遙か南の大陸に位置するケティットという村に少女は住んでいた。少女はここ朝が好きだった。

年中、春風のように柔らかく暖かい風を毎朝妹と浴びに行くのが少女の日課だった。

少女は胸いっぱいに風を吸い込む。隣にいる彼女の妹も同じように真似をする。

「ふう……」

少女はゆっくろと息を吐き、それから金色に光る太陽をまぶしそうに見つめた。

「今日も村が何事もなく平和でありますように」

少女は深呼吸をした後に、このお祈りを必ず行う。少し高くなっているこの丘から太陽を眺めると、太陽が村をいつも守ってくれているように見えるのだ。

「お姉ちゃん、そろそろ帰らないと学校に遅刻しちゃうよ」
彼女の妹が後ろから声をかけた。少女は名残惜しそうに太陽に背を向けると「じゃ、行こうか」と妹にっこりと微笑んだ。

「よおーし、家まで競争だからね！」

彼女の妹は元気よくそう言つなり、会図もなしに勝手に丘を駆け下つていった。

「ま、待つてよお！」

少女は既に陸のふもとの辺りまで走っている妹に追いつこうと、慌てて走り出しが、慌てていたせいで、前のめりになり盛大に転んでしまう。少女は運動が苦手なのである。それが、ただ走るだけのことであつても。

「いたたた……」

少女は痛む膝を押さえながら立ち上がった。丘のふもとでは妹が手を振つて何かを叫んでいた。

「今行くよー！」

少女はそれだけ叫ぶと、再び転ばないよう気をつけて丘をふもとまで駆け下つていくのだった。

少女の名前はミル。

ミルハープ・エレウスはケティット村に住んでいるおつとつした少女で、気を抜けばいつも寝ているのではないかとうくらいのほほんとしている。彼女は訳あって、村の学校に通わず隣町の魔道学校に通っている。そのため、この村の子供達が学校に行く時間よりもはるかに早くに家を出なければならないのだ。

家族がのんびりと朝食をとっているときでも、彼女は一人バタバタと家の一階と二階を往復している。

「いつてきまーす！」

ミルは玄関から家族に向かつて叫ぶと、清々しい太陽の下を馬車の停留所まで走つていく。別に遅刻をするというわけではないのだが、ミルは村の清々しい朝の中を散歩をするように走つていくのが好きだった。

サワサワサワサワ。

馬車の停留所にゆつたりとした風が流れる。

(そ う い え ば 、 エ ス パ ー ル は も う 街 に つ い た の か な)

「ふう、これでよしつと」

アルスはペンを置くと、窓を開けて口笛を吹いた。これでいつもなら彼がここに来るはずだが

「エスペールが怯えてこなくなつたらあいつのせいだからな……」

アルスは『あいつ』のいない部屋で一人ぼやく。

バサバサ。

鳥が羽ばたく音が聞こえた。アルスが幼い頃聞いたあの羽音に間違いがなければやつてきくるのは彼のはずである。

「エスペール」

アルスがあらかじめ出していた右腕にポンっと止まつたのは白くて少し体が大きめの鳩だつた。エスペールは優しい目をしながら喉を鳴らしている。

「昼間はごめんな。あれでも一応俺の友達なんだよ。だから勘弁してやつてくれな」

エスペールは何も言わず、首をきょとんと傾げているだけだつた。夕方のことはもう気にしないらしい。

「いつものように、ミルへの手紙を頼みたい」

アルスはそう言うと、街の百均で買った手紙用の小さな筒に今書いた手紙を丁寧に巻いて、その中に入れた。

「たつだいまー！」

あまりの馬鹿でかい声にアルスはまたエスペールが逃げ出さないように瞬時に窓を閉めた。幸い、エスペールは何とかあの奇声に耐えていたようだ。

「あれ、アルスはまだ部屋にいたのか。手紙、書けたのか？」

「ああ、とアルスは頷く。

「お前も早く風呂に入つてこいよ。気持ちいいぜ」

ゲイルの体からはまだほんのりと湯気が出ていて、ツンツンとした髪型がいつも以上にツンツンとしていた。これはもう鋭利な刃物の糸だ。そういえば、ここより東の忍者学校で水をかけてついた癖つ毛を武器にした学生がいた話を聞いたことがあった。

（あれどどつこいだな）

「お前、今とてつもなく変なこと考えていたろ？」

鋭い……。ゲイルは男のくせに結構人の考えに鋭いところがあつた。

「この頭で串刺しにされたくなかったら早くお前も風呂に入つてこい」

「それは拒否する」

「W h y?」

「なんでって、俺が風呂に行つている間にエスパールから手紙をふんだくつて読みそだだから」

「う、なんでわかった？」

「何年お前と友達をやつて^{タチ}いると思つんだ。今年でもう一桁だぞ。一桁の大台だぞ？」

「体重みたいにいうなよ……」

「というわけで俺はお前が手紙を絶対に見ない、エスパールにちよつかいを出さないといつて一点を守ると誓わない限り風呂にはいかな！」

「おれはおまえがふるにはいつてゐるあいだにてがみはせつたいてみないし、えすぱーるにもちよつかいをだしません」

「棒読み丸わかりだ」

アルスが指摘をすると、ゲイルはしづとい奴目と言わんばかりに彼をにらみつけた。

「宣誓！某は貴殿が重湯にお浸かりになつてゐる間にお手紙を拝見することはせず、また貴殿の親友のエスペアル殿にも悪戯はいたしませぬ！」

「古風な言い方だから信用できない。却下！」

「…お前、完全に俺で遊んでいるだろ？」

「そんなことはない。お前が……あつ…」

しまつたと思つたときにはもう遅かった。ゲイルはまだ机の上に置きっぱなしにしてあつた手紙を素早くひつたくつていた。

「作戦成功。名づけて『俺が下手に出でていれば…作戦だ』…」

「作戦名、まんまじやないかよ…」

アルスは悔しそうにつぶやいた。

「えうつと、何々…」

ゲイルは数秒間、アルスの書いた手紙にじつと目を通すが、やがて、あきれたようにため息をつく。

「お前これ、近況報告を書いているだけじゃねえか」

友人の一言に今度はアルスがため息をついた。

「だから嫌だつたんだよ。お前に手紙を見せるの」

「確かに去年までは、否、去年までもこんな手紙では駄目だと俺は何度も指摘してきただろうが！」

「もつと愛だのLOVEだの書け！つていうお前の台詞も聞き飽きたぞ」

「うぐつ！」

「大体、何年も俺とあいつはそんな関係じゃないって言つてはいるだろうが。あいつだって、きつとそう思つてはいる」

「わからないぞ。お前、彼女に面と向かつて聞いたのかそれ？」

「聞いていないけど、とアルスは氣弱に俯く。

「お前ももう十六だろ？そろそろ女の気持ちも考えてやつてだな…」

「エスパール、これを頼む」

エスパールは小さな筒をしつかり両足で掴むと、窓の外へとそのまま飛んでいった。

「あ、てめえまだ話は終わってないぞ…」

「お前の話に付き合っていたらエスパールが寝てしまつ

「鳥のことなんか知るか…」

「じゃ、俺は風呂に行つてくるから」

アルスはそそくさと入浴の準備を済ませると、せつと部屋を出て行った。扉の向こうからゲイルの声で「覚えてやがれー！」と聞こえてくるが気にならない。

そう、気にする必要など何一つないんだ。子供の頃にした約束なんてとっくに時効だかなんだかで忘れられているに違いないんだ。

ケティットから馬車に乗つて三十分ほど東に進むとノクターンという町がある。ミルはこの町のシユトレーン魔法学校に通う生徒で、成績はいつもクラス、学年どれも万年一位の好成績を収めていた。さらに自身の容姿・性格の良さも重なつてシユトレーンの、いやノクターンのマドンナのような存在になつっていた。

最も、のんびり屋のミルに自覚はない。

さらに特異なことに、彼女のような絵に描いた優等生といえば同姓や同じ秀才たちからの嫌がらせなどが目立つものだが、ミルハープに関してはそんなことは一切なかつた。周りからどんなに賞賛を受けようが、彼女はそれにおごることなく常に努力を続けている。そのことを周りの人間は皆知つていたからだ。

「おはよう、ミル」

「おはようございます。エレウス先輩！」

「オーッス、ミル嬢！」

ミルハープが街を歩くと全員が彼女に振り返り、声をかける。そんな町人や学校の生徒たちにミルはいつも明るく返事を返すのだった。

シユトレーン魔法学校でのミルの一曰はまづ級友たちに挨拶することから始まる。

教室の扉を　　女の子にしては　　豪快に開け放ち、大きく胸いっぺいに息を吸い込む。

「おはようございます！」

この挨拶こそがミルのノクターンの一曰の始まりだ。

「おはようエレウスさん」

「おーっす、ミル」

「ハロー」

教室のあちこちから挨拶が返ってくる。これこそが上述で述べたよつこミルが優等生でありながらいじめをうけない理由の一つでもある。彼女は誰に対しても気さくな少女であった。とにかく、ミルはここのショートレーン魔法学校の最上級生あと一年間この学校に通えば魔法学術の課程は一応終了したことになる。

（でも、本当にこれでいいのかな）

ミルは最上級生になつてからそのことでよく悩んでいる。確かにショートレーン魔法学校の中ではクラス・学年どれをとつても一番だが、自分以上の魔法の使い手を知らないために自分の扱う魔法にいまひとつ自信が持てないでいた。

（アルスは前に自分以上の剣士と試合をしてぼろぼろに負けたという手紙をくれた。やっぱり遠くに出ないと自分の実力ってわからないうものなのかな…）

ミルは最近、よく図書室に行く。魔法についてもつと詳しいことを勉強するためだ。高等魔法と呼ばれるものがあれば、見よう見まねで使ってみようとするし 成

功は滅多にしないが 学校の授業ではあまり多くは語られない魔法の歴史について

も知ることができる。魔法に関する図書を読むと、必ず自分の知らない単語や記号が

出てくる。その意味を解読したり訳したりする時がミルの一一番の幸せだったりする。

『……古代に魔法王国として栄えていた国には次の五つである。ミスリル・ラクチュアリ・ドーマ・レスミール・アリミン。これらはの国々は…』

（あれ、このレスミールってアルスが通つている剣の学校があるとこねじや…？）

「ほつ、古代の五大王国ですか」

椅子に座つてこるミルの背中に渋いバリトンが伝わってきた。

図書室長のグレバートだった。

「グレバート先生」

「世界中に魔法王国と呼ばれる国はいくつもありますが、その中でも古代から現代に至るまでずっと影響力の衰えない国々がこの五つです」

「先生、このレスミールという国はどういう国なのですか?」

「レスミールは五大王国の中では一番歴史は浅い国ですが、魔法・武術のどちらにも長けている国ですね。国の象徴としてレスミンという花が街中に咲いていてとても綺麗な街だと聞きます」

「魔法にも武術にも長けている国……」

「やめておきなさい、ミル」

グレバート室長はため息をつきながらつぶやいた。

「いかに貴方がこの学校位置の成績優秀者であり、この学校の図書をすべて熟読していてもレスミールの魔法学校に行くことは不可能でしょう」

「え?」

ミルは自分の考えていることを先に言われ、しかも黙口だしまでされてしまい顔を曇らせた。

「残念ながらシコトーレーン校のレベルではあるか及びません。レスミールの学校をうけたいのであれば、まず魔法使いとして熟練しているレスミール出身の者に話を聞くべきでしょう」

「……」

「幼なじみを追いたくて焦る気持ちはわかります。私もどうにかしてあげたいのですが、残念ながら私は魔法使いとしての力量はほとんどない。貴方にこうして注意を促してあげることしかできないなんて情けない限りですよ」

「そんなことないです。グレバート先生の忠告がなければ私は無謀にもレスミールに行くつもりでした。彼に会つためなら……」

ミルの脳裏にアルスの姿が浮かぶ。

（もう十年になるんだよね。早く会いたいよ……）

午後も中ほどを過ぎ、シユトレーン魔法学校の一日が終わる。生徒たちは部活に行く者・帰宅する者に分かれ、それぞれの行くべき場所へと散っていく。

部活に入っていないミルは寄り道をせずに馬車の停留所で場所を待つ。そして、再び三十分ほどかけてケティットの村へと帰っていく。そしてまた、特に寄り道もせずに家まで帰るのだが、今日は違つた。

「あのお、すみません」

ミルは突然声をかけられた。

この出会いこそが彼女の運命を左右することとなるとは、ミルはまだ微塵も気づいていなかった。

第5話

今日の天気は快晴。

絶好の試合日和だ。

「いい天気だぜ。天気が悪いとテンションが下がるからな」
ゲイルは練習用のフラットソードを鞘から抜いた。

「へへ、腕がなるぜ」

「相変わらず試合になると元気が出るなお前」

軽いプレートアーマーをつけながらアルスは笑った。

「あつたり前だろ。練習だと教官が横槍を入れてくるから嫌いなんだよ。試合なら自分の好きな型で勝負できるからな」

確かにゲイルの言うことも一理ある。しかし、この武術学校に入学して晴れて卒業をすると、レスミール王国騎士団の騎士採用テストに面接なしの実技のみで挑める資格を得られるためお得なのである。その実技試験のときに型どおりの試合ができることが騎士団に入る条件のひとつにあげられているといつわけである。

「別に俺はここに騎士団に入りたくて剣術をやつしているんじゃないんだけどな~」

ゲイルがぶつぶつとぼやく。

「まんざら悪いものでもないだろ?。型どおりにやれば、少なくとも自分のミスで被害を受けることはないし」

「しかし、鞘を抜くところから普通訓練するかあ?」

「必要だからするのだろ?。ま、俺も正直あまり必要だとは思つていなわけです」

ついつい本音が出てしまう。ゲイルが嬉しそうに「だろ?」と笑う。

「今日はそれを教官どもにわからせてやるぜ!」

先にアーマーをつけ終わったゲイルが颯爽と更衣室を去つていった。

（わからせてやつたとしても、それで教え方が変わるとは思えないけどなあ）

アルスはそう思ひながらも、熊の召集が掛かっているのを聞きつけ急いで支度を整えた。

熊、もとい審判員である武術教官の召集を受け、アルスたち生徒は円形闘技場を模した小さな広場に集められる。主に試合と名のつく儀式を行うときは試験や練習試合であつてもここを使う。

練習試合とはいえ、観客席は満員御礼である。その中でもひときわ目立つ集団がある。夏が来るにはまだ少し時期が早いが、それでも厚手のローブを着ているのですぐにわかる。あれはここ、レスミルス武術学校と対を成すレアドナー魔法学校の生徒たちだ。この二校はよくキャラキャラした者たちが もちろんそうでない者もいるが 合図だのを設定したりしていてそれなりに生徒同士の友好関係は深い。そのため、自分の彼氏や友人を応援に来る女子がここに来ているのだろう。ゲイルに言わせると「ケツ、ぐだらねえ」らしい。

「そういえばトーナメント表をまだ見ていなかつたな」

「そうだった」

アルスとゲイルはベンチの後ろに貼つてあるトーナメント表に目をやつた。二人は見事に違うブロックに属させていた。

「まあ、気張らざるにこつぜ」

「ああ。どうせこの試合も何十回目かわからないしな。いまやる緊張なんてしないぜ」

「それもそうか。そんじや、決勝で会おうや」

「途中でしりもちつくなよ」

「途中で逃げるんじゃねえぞ」

アルスとゲイルの間には熱い火花が飛び散っていた。

「なんでしょうか？」

ミルは尋ねてきた男を見上げた。身長は一八〇cmくらいだろうか。ミルよりもはるかに高く、結構首を傾けないと顔が見えない。

「宿屋の場所を教えてほしいのですが」

長身の男は土ぼこりにまみれていたり、といいながら擦り傷や切り傷もあつたりした体でそう聞いてきた。

「宿屋はこのまままっすぐ歩いて、別れ道を左に行つたらありますよ」

「ありがとうございます」

長身の男は丁寧に頭を下げた。

なんというか木がお辞儀をしているみたいに見えた。

「あの、もしかして冒険家さんですか？」

ケティット村に冒険家が来ることなどほとんど稀だったので、ミルは珍しそうに青年に尋ねたといふ。青年は「そうですよ」とつっこり微笑んだ。

「この村に冒険家が来るのはとても珍しそうですね」

「ふえ、どうしてわかったんですか？」

「貴方のように可愛らしこよしお嬢さんの顔を見ればすぐにわかりますよ」

「か、可愛いだなんて…」

ミルは両手を頬に当てて恥ずかしそうにしづぶやいた。そんなミルの様子を冒険家は楽しげに見つめていた。

「ここで会つたのも何かの縁です。自己紹介をしておきましょう。僕はラスレン・グレーヴォルです。見てのとおり冒険家です」

「私はミルハープ・エレウスです。この村の皆はミルって呼んでくれてます」

「では、僕もそのように呼んでもいいですかね？」

「もちろんですよ」

ミルはこいつと微笑んだ。

ラスレンはミルの案内で五分もかからずに宿屋に到着した。

「はい、ここが宿屋です」

「ありがとうございます。こんなところにあつたんだなあ。村の中を一周しても見つからないわけだ」

「少しわき道のほうですからね」

実際はほとんどケティット村のはずれといつてもよい。

「ミルさん、案内をしてくれてありがとうございます。おかげで野宿をせずに済んだよ」

「野宿ですか。村の中で野宿も楽しそうだなあ……」

「普通は野宿するときは村の外に出ますけどね……」

ラスレンはそう言って苦笑した。

（なかなか天然差を見せつけてくる娘だ）

「それでは、僕は一旦荷物を置きに行きますね。ミルさん、機会があればまた会いましょう」

そう言つて背中を向けたラスレンを、ミルは思わず呼び止めた。

「なんでしょう？」そう言つてラスレンはゆつくりと振り向く。

「あの、ラスレンさんはレスミールという街を知っていますか？」

「ええ、知っていますよ。ソグリアテス大陸にある魔法王国ですね」

「私、一流の魔法使いを目指しているんです。いまもこの村の隣街のノクターンで魔法の勉強をしています」

「ほう、一流の魔法使いですか。確かにレスミールは五大魔法王国の一国ですから、魔法の勉強にはうつてつけでしょうね。しかし、レスミールにあるレアドナール魔法学校はハーダルの高い魔法学校で有名です。ミルさんのいうノクターンの魔法学校がどのくらいのレベルかは知りませんが、並みの魔法学校程度のレベルでは到底試

験には受からないでしょ？

「そ、そなんですか…」

ミルは力なく首を垂れる。

「何か事情がおありのようですね。よければ話してもらえませんか？」

「実は…」

ミルはラスレンに全てを話した。

幼なじみのことや、彼の父親が言つたこと、魔法学校の出来事…

「なるほど、そういう事情でしたか」

「私、早く一流の魔法使いになりたいんです。そして、彼に会いたい」

「レスミールですか？いくら一流の魔法使いとてレスミールまで一人で旅をするのは少々心もとないと思いますが」

「それでも会いたいんです！彼は私にとつて大きな支えだから…」

「…」

ラスレンはしばらく何かを考えるようになごに手を当てた。そして、ミルにこう提案した。

「僕はネクシス大陸を北上する旅をしています。これは貴女の意思次第ですが、貴方にその気があるのなら僕が幼なじみのいるレスミールまでお供をしますよ」

「え？」

突然の誘いにミルは何を言われたのかわからなかつた。

「冒険家になることは魔法使いとしての自分の力量を知るいいチャンスにもなります。まさに一石二鳥だと思いますが？」

ラスレンの提案に、ミルはすぐに返事を返せなかつた。今現在までただの村娘である自分がいきなり村の外に旅に出るなんてすっかり考え込んでしまつたミルにラスレンはゆっくりと背中を向けた。そして去り際にこう言つた。

「二、三日はこの村に滞在することになるでしょう。その間に答えを聞かせてください」

ラスレンの言い方はとても優しいものだったが、ミルには重みのある言葉以外の何者でもなかつた。

アルスは順調に試合を勝ちあがり、あつといつ間にトーナメント表の王冠に近づきつつあった。さすが、伊達に十年もの学校にないだけのことはある。

「よう、勝ち抜いているじゃねえか」

「お前こそ。さっきの試合見てたぜ」

そういうアルスの顔には相変わらずだなと言わんばかりの微笑が浮かんでいた。ゲイルは「まあな」と笑った。

「ところで次のお前の相手だけよ…」

「うん?」

「ありやあ、気をつけたほうがいいぞ」

「…強いのか?」

アルスの顔がキュッと強張つたものになる。

「ああ、強敵だぜ」

ゲイルはそう言って闘技場の観客席を指差した。下の位置からではよく見えないがゲイルの指した先には、女の子たちが数人輪になつていた。そして、その中心にいる背が低めの男。

「最近ではああいう男がもてるらしい。もはや三Kは意味を持たず

にいるな」

真剣な表情をしているゲイルとは逆にアルスはまたか、と小さくため息をつく。

審判員が響きのある肉声で次の試合の対戦者、すなわちアルスと観客席にいる男の名を呼んだ。アルスはぶつぶつとぼやくゲイルに蹴りを入れてから闘技場の真ん中へと進み出た。

「準決勝戦! アルス・マディーン対○○○!」

審判員はアルスの対戦者の名前を読み上げたが、アルスには別段

興味はなかつた。今、考へてゐることはただ一つ。目の前の対戦者がどれほどの手並みかということだけだつた。いでたちや試合に対する緊張感がそれほどないことから一年以上は同じことなどが予想できる。

（少しばらしめるかな？）

アルスは剣の鞘に手をかけて試合の合図を待つ。

「開始！」

審判員の声と旗を揚げる右腕を合図に両者が突進する。まずはかち合い合戦に持つていくのはアルスが初対面の相手と対戦するときに必ず使う手だ。互いにぶつかり合い、剣と剣との押し合いでの対戦者との大体の力量差を測る。文章で書くと、屁理屈をこねているようにしか見えないが、実際アルスはこれをほとんど長年の経験で瞬時に、無意識で行つてゐる。

（ふうん…）

アルスは押し合いながら、対戦者の顔をチラリと見る。流石に準決勝だけあって、今までの対戦者と少しばらしは違つことを試合が始まつてから数秒で判断した。

（これならどうだ）

押し合いでの勝負の場合、いかにして身を引くかも大切な戦法の一つである。

「！」

対戦相手の男はアルスが不意に身を引いたことに驚き、前のめりになる。アルスの作戦は成功である。対戦相手の男はすぐに体勢を立て直すと、まっすぐにアルスに向かつて突進してきた。

「やああああ！」

男にしては高めの声だな、と思いつつアルスは敵の突きをかわすとすかさず小手の上に一撃を浴びせた。

「つう！」

男が小さなうめき声をあげる。相手がひるんだ一瞬の隙を逃さずアルスがもう一撃を加え、試合はアルスの勝利に終わつた。対戦相

手の後ろの観客席から悲鳴やらブーイングやらが聞こえたが、男は
気にもとめずアルスに握手を求めた。

試合を終え、ベンチに戻るとゲイルが上機嫌でアルスの肩を叩いてきた。

「さすがアルスだぜ。あんなモテモテ野郎に負けるわけがねえやな
「まあな…」

アルスはとりあえずゲイルにあわせておいた。

「そういや、次はお前も決勝だな」

「ゲイルは？」

「もちろん、俺も決勝だぜ。例年通り、俺とお前の対決だ」

「へ、もうあんな技は通用しないぜ」

アルスはニヤリと口元を緩める。

「誰があんな技を使うかよ。今回はもっとすげえの用意してきたぜ。前みたいに正統派のバトルにはさせねえぜ」

ゲイルもいやらしく笑う。数秒間、お互いに不敵な笑みが沸き起こつた。そして、再び審判員によつて一人の名が呼ばれる。

「決勝戦！アルス・マティーン対ゲイル・ホーンラグ！試合開始！タンツ！」一人の少年が軽快に地面を蹴る。そのままぶつかり合いに持つていく……と思いつきやゲイルの姿が突然消えた。

（真上か）

アルスはそのまま走るスピードを落とさず、軽くジャンプをして方向転換をする。振り向きざまにゲイルの剣が振り下ろされてきたので、それを軽く受け止める。

「いつもどおりの戦法じゃないか？」

審判員に聞こえないよつにつぶやく。

「へ、これはいつものご挨拶よ。本番はここからだ」

両者は一度身を引き、再び突進を仕掛ける。甲高い金属音が響き、剣と剣がかち合う。押し合いはそのまま続くかと思いきや、ゲイルが突然勢いよく身を引いた。しかし、ゲイルの常套手段であることだと知つてゐるためアルスは特に体勢を崩すことなく次の攻撃に移

つた。再びかち合い、不意にゲイルがアルスの後ろに向かつて「あつ！」と叫んだ。

「あれはなんだなんて古い戦法はもう通じない！」？

アルスの股間に恐ろしいほどの痛みが走った。「ま、まさか…」とアルスはゲイルの一本の足に注目する。右足がまっすぐアルスの股間に向かつて伸びている。一応アーマーはついているもののやはり効果は大きい。

「へへ、いい一撃だろ？このまま俺が引けばお前は…」

ゲイルは嫌らしい笑みを浮かべながらあたかもかち合いから引き合いで持つていくかのように後ろに飛び退いた。まだ激痛が残っているアルスは剣がかち合うことによって得られていた支えを失くしへなへなと情けなくその場にしゃがみこんでしまう。

「勝者、ゲイル・ホーンラグ！」

何が起こったかを知らない審判員は地面に座り込んだアルスをあつさりと戦闘不能とみなして、勝者宣言をする。周りからの歓声が響く中、ゲイルはあたかもよく戦い抜いたアルスを助け起こすかのようすに手を差し伸べ、闘技場はさらに沸きあがつた。

「ただいま」

ミルは力なく玄関で靴を脱ぎ捨てた。

「おかえり、お姉ちゃん」

吹き抜けになっている一階からミルの妹モアが首を出して姉の帰りを迎える。

「おかえりなさい、ミル。今日は一段と遅かつたじゃないの」「ごめんね、お母さん。村に来た冒険家さんを宿屋まで送り届けていたの」

「そうなの。変なことは吹き込まれたりしなかつた?」「え?」

ミルは一瞬ギクリとした。

もしかして、あの現場を見られていた?両親にだけは決して見られてはいけない会話を見られていた?

「ど、どうして?」

ミルの両手にじんわりと脂汗が浮かんでくる。

「だつて、宿屋に送り届けるだけならすぐに帰つてくるはずだから。もしかしたら何かあつたのかなって心配していたのよ」

「そうだつたんだ、『めんなさい』。でも、何も吹き込まれていないから大丈夫」

「…そう」

ミルの母親はどこか疑いのまなざしを向けていたが、それ以上追及はしてこなかつた。ミルは母親が去つていき、ようやくホツと胸をなでおろした。そして、やや駆け足で一階に上ると、妹の部屋を軽くノックした。

「なあに、お姉ちゃん」

「ちょっと相談したいことがあるんだけどいい?」

「うん、別にいいよ」

モアは姉を部屋に迎え入れると、誰にも聞こえないようにドアを閉めた。

「それで、相談ってなに?」

モアに聞かれ、ミルはラスレンとの会話を全て話した。話を聞き終えたモアは「ふーん」と意味深につぶやいた。

「それで、お姉ちゃんはその人についてアル兄のいる街へ行くの?」

「できれば行きたい…」

「お母さんたちにはどう説明するの?」

「それは…」

ミルは答えられなかつた。ミルの両親はとある時を境に冒険家を酷く嫌うようになつた。娘が冒険家になると知つたら激怒どころではすまないだらう。自分のわがままのせいでの家族が崩壊するのは耐えられないことだ。

「じゃあ、アル兄を諦める?」

「そんなこと、できないよ…」

「お姉ちゃん、それじゃ相談にならないよ。堂々巡りを繰り返すだけ」

「わかつてゐる。だけど、今を逃すといつアル君に会えるかわからなくなる。手紙だと会えるのはまだ当分先みたいだし。下手したら一生会えなくなるかもしねー」

「まさか。アルス兄はここに帰つてくるよ。お姉ちゃんを放つたままにするわけないでしょー。あの時の『せにやくしょ』まだ持つてゐんでしょう?」

「持つてるよ…」

「じゃあ、大丈夫でしょ。そんなに心配する」となつて…

「……」

結局、この日はモアに言つぐるめられたミルはそれ以上何も言えなくなつて妹の部屋を後にした。その後も、ミルが悩む度に時間は

急速に進んでいった。

ミルはずつと二つの領域の間を右往左往していた。このままここにいてもアルスは『せいやくしょ』を果たすために必ずミルを迎えるだろう。しかし、それはいつの日になるかわからない。明日かもしれないし一週間後かもしれない。もしかしたら十年後になるかもしれない。それでも、アルスは約束を守るためにここに帰つてくるだろう。一方、ラスレンと共にレスミールへ行けば、少々辛い日々が続くかもしれないが比較的すぐにアルスと会うことができる。それに、夢にまで見た五大魔法王国の一つを観光できるのだ。これほど嬉しいことはない。だが、その代償としてミルは家族を捨てなければならぬ。相談ができるものならしているだろうが、あいにくとそうもいかない。話そつものなら真っ先に反対されることは必至だろう。

ミルは自室の窓からぼんやりと外を眺めていた。今、自分がこうしてぼんやり外を見ている間にアルスは何をしているのだろう。気になつて仕方なかつた。もしかしたらアルスはもうすぐそこまでミルに手を伸ばしていいのかもしれない。ラスレンを使えば、アルスの手を取ることができる。しかし……

気がつけば、ミルは宿屋に向かつて歩いていた。おばさんに挨拶をして、一階の客室をノックする。

「どうぞ」

優しい声が返つてくる。ドアを開けると、ラスレンが「やあ」と快く迎え入れてくれた。

「今日が約束の三日目ですね」

「……」

「決心はできましたか？」

「……」

「前にも言つたとおり僕は冒険家です。こんな体でも貴方を守ることができますよ。レスミールへは必ず送り届けると約束します」

「…………」

「僕は貴方の意思に重なり助力をするだけ。貴方がその意思を破棄するといつのであれば、僕もいつもの旅に戻るだけです」

「「…………」「」

宿屋の一室に永劫とも言える長い沈黙が訪れる。ミルはひたすらラスレンの淹れた紅茶に視線を落としたままで、ラスレンもまたそんな彼女を黙つて見ていた。

「出発は……」

ミルがつぐんでいた口を開いた。

「出発は今日の夜更けまで待つてもらえませんか。皆に氣づかれたくないから

「……わかりました。では、それまでに準備を整えておいてください」「はい……」

ミルは小さく頷き、ラスレンの部屋を後にした。

(これで、いいんだよね)

ミルはふつと宿屋の窓を見上げた。まだ高い位置に太陽がある空の下では何羽もの鳥が楽しそうに戯れていた。

方へ』

（第一章）『想いを彼

第9話

ケティット村はネクシス大陸の中でも一、二を争うほど夜の訪れが早い。太陽が沈んでから一、三時間もすれば辺りは一寸先も見えぬ暗闇と静寂に包まれる。忍びの旅にはまさにうつてつけの夜だった。

ミルはせめて妹にだけでも声をかけていこうかと思つたが、それが原因で両親に見つかって引き止められてはまずいので涙を飲んで妹の部屋の前を後にしたのだった。

すっかり闇に閉ざされたケティットをミルは手探りで進むように慎重に早足で歩いていく。さつきも言つたとおりケティットの夜は早い。辺りが暗くなれば外を歩く村人なんていないのだ。そのため、昼間とは若干勝手の違う道にミルは迷わないかどうか心配だった。いや、案の定迷つていた。ミルはすっかり村のはずれの、つまり宿屋のあるほうへと進んでいた。待ち合わせの場所は村の出口なので、方向からいうとまるつきり逆方向である。

「お姉ちゃん、どこ行くの？」

「これからラスレンとの待ち合わせ場所に行くの」

「それって、村の出口でしょ？」こは宿屋だからまるつきり反対だよ？」

「え？」

道を歩くミルの足が止まる。そして、同時にどうして自分に話しかける人物がいるのだろうとのんびりとながら疑問に思う。

「あ、えーと、もしかしてばれてたりするのかな…?」

ミルは背中を向けたまま、しかし額には大量の汗をかいたままつぶやいた。

「ばれてるよ

声はあつさりと突き放すように言った。

「ただし……」と声の調子が急に明るくなる。

「あたしにだけだけどね」

ミルの背中からモアがひょっこりと顔を出した。

「きやあ!」

「わあ、駄目だよお姉ちゃん。皆起きちゃうよー。」

モアは小さな声で叫びながら姉の口元に人差し指を置いた。幸い、声を聞きつけた村人はいないようだ。

「どうして?」

落ち着いてからミルが話を切り出した。

「うーん、話聞いてたらなんか楽しそうだなあ……と思つたから。それに、いつかはアル兄みたいに自立してどこかの街に行きたいなって思つていたしね」

「モア…」

「早く行こうよ。待ち合せの時間までそんなにないんでしょ?」

「あ、いけない。急いで!」

待ち合せに少し遅れたものの、ラスレンと合流できたミルはモアのことを話すと「可愛いお嬢さん一人と旅をするなんて願つてもないことです」と一つ返事で了解してくれた。

「夜遅くの出発ということも踏まえてケティットの隣町ノクターンで宿を取ろうと思いますが」

「りょーかーい!」

「……」

「ミルさん、どうかしましたか？」

苦い顔をしているミルにラスレンが怪訝な顔をして尋ねる。

「『めんなさい』。ノクターンは私が通っていた魔法学校があるから下手をすると見つかってしまうかも知れないと」

「なるほど。しかし、港町ネアールに行くにはノクターンから北上していったほうが早い。南からだと迂回してしまった形になりますよ」

「あ……」

ミルの気持ちを知つていてか、ラスレンは諭すように言った。

「いいんじやない、お姉ちゃんがそうしたいなら」

なかなか結論を出さないミルにモアが明るく言った。

「迂回したつて近道したつてアル兄のところにいくまでの日いちが前後するだけで会えることには変わりないでしょ。ならどのルートで行つてもおんなじだよ」

「確かに、モアさんの言うとおりですね。僕は貴方を幼なじみのところまでちゃんと送り届けると約束しましたからね。貴方たち一人が決めたのならばどこへでもお供しますよ」

ラスレンもにっこりと笑った。ミルは一人の笑顔に申し訳なさそうに頭を下げた。

「ありがとうございます」

「では、ルートを変更してケティットから西を回つて行きましょう。ただし、今夜は野宿ということになりますので、こぞとこぞときのための覚悟はしておいてください」

「??」

「は、はい……？」

二人の少女はラスレンが何に対しても覚悟をしておくように言ったのかわからなかつたが、とりあえずこれで旅の進路は決まった。
(アル君、できるだけ早く会いに行くから待つててね)

ミルはアルスへの想いを乗せてモア・ラスレンという仲間と共にネクシス大陸全土を回る旅に出るのだった。

「それでは、今日はこの辺りで野宿にしましょっ」

ラスレンは軽く両手を叩いて微笑んだ。彼のその一言で今まで無言で歩いていたミルとモアの表情がホッと和らいだ。

「では、これから野営の準備の説明をしますのでよおしく聞いて聞いてくださいね」

ただでさえ、遠出に慣れていない一人にとってラスレンのこの一言は彼女たちを地獄に叩き落とすも同然だった。

「野宿って、ただ草の上に寝るだけじゃないの〜？」

普段は村の中を駆け回って元気いっぱいのモアも慣れぬ遠出にラスレンに文句を垂れる。

「まさか！ そんなことをしたらたちまち夜行型の魔物に襲われてしまいます」

「でも、ここで寝るんですね？」

ミルが草の上にしゃがみこみながらつぶやくと、ラスレンはこいつと微笑んだまま袋の中から三つセットの球体を取り出した。

「そこで活躍するのがこの結界球です。この三つの球で自分たちの休む部分を囲んでやると、魔物はそこから中には入ってこれない：とこう仕組みです」

なにやら胡散臭そうな説明だったが、ラスレンによれば、これはどの冒険家も常套の装備らしいのでおそらく嘘はないだろう。

早速この三つの球体を自分たちが休む場所を囲むようにして配置する。

「この時の注意点ですが、結界球はなるべく広めに配置することです。理由は二点あって、一点目は単純に寝るスペースを大きく確保したり、集いの場を広くしたりするため。もう一点は……まあ、今

日起こるかはわかりませんが実際に遭つてからのほうが説明しやすいですね

「「？」」

ミルとモアは揃つて首を捻つたが、この際寝られれば文句はなかつた。

「次はテントの設営ですね。これは簡単です。この簡易テントにこの空気ポンプで空気を送り込むだけです」

ラスレンはそう言つて空気ポンプを一、三回足で踏み込んだ。すると、たつたそれだけの動作で今までただのつぶれた布切れだったものが小さな一つの家として完成した。

「すごいすごーい！」

モアは眠いのを忘れて目を丸くしてテントが膨らむ様子を見ていた。

「後はこの中に入つて寝袋を敷くだけです」

「わあーい！早く休もうよ。もうクタクタ…」

「そうですね。次の日のために体を休めておく」とも冒険家の心得の一つです」

ラスレンはそう言つて荷物の上にくくりつけてあつた寝袋を一いつ、ミルとモアに渡した。

「あれ？ラスレンさんの分は？」

ミルが問うと、ラスレンは苦笑して言つた。

「実は、旅に同行するのはミルさんだけだと思つていたので一いつしか寝袋はないんですよ。と言うわけでお一人のどちらかには僕の寝袋を使つてもらうことになります」

ラスレンはその後に「もちろん、ちゃんと消臭しますから大丈夫ですよ」と笑顔で告げた。

ラスレンにそう言われて、一人の動きがピタリと止まつた。ラスレンの分の寝袋を奪つておいて気持ちよく眠ることなんてできないだろう。ラスレンもそんな雰囲気を感じ取つたのか「大丈夫ですよ」と微笑んだ。

彼が袋から取り出したのは薄手の毛布だった。

「今夜、僕はこれに包まって寝ますから。安心してお休みなさい。さつかも言つたとおり次の日は故障が出ないよつこよく休んでおくことも冒険家の大事な仕事です」

二人は結局ラスレンの笑顔に負けて、テントの中で寝袋に包まって休むことになった。歩きつかれたのか、少女たちはテントに入つて間もなく可愛らしい寝息を立てて眠つていた。その様子を微笑ましげに見つめながら、ラスレンはある計画を実行するのであった。

「起きてください……！」

ラスレンの大声に、ミルとモアは眠そうながらも身を起こした。

「なあ～に？」

「どうしたんですか？」

眠そうに尋ねるミルとモアにラスレンは申し訳なさそうな顔で「やられました……」と言だけつぶやいた。

「グルア！」

「くう！」

ラスレンは長い棒のよつなもんで噛み付こうとしてきた狼をかろうじて食い止めた。

「「ラスレンさん……」

一人の少女がテントへの進行を必死に食い止めていたラスレンの名を叫ぶ。

「これ以上先には行かせませんよ」

ラスレンは、長い棒をそのまま真上に振り上げて狼を後ろに退かせた。ラスレンがテントを出たのに続いて、ミルとモアも外に出た。結界球は見事に破られ、テントの周囲を狼達が囲んでいた。

「結界球が破られている……」

「どうして……？」

「中には結界球を破つてくる者もいるんですよ。この辺りの魔物にそんな力はないと思っていたが、油断しました」

「ど、どうするんですか……」

狼に一步、また一步と追い詰められながらミルがつぶやいた。ラスレンは苦い顔をして「この包囲網を打ち破ります」と低い声で告げた。

「貴方たちに魔物との戦い方はまだ早いと思つていましたが、こうなつては仕方ありません。なるべく僕から離れないとください。行きますよ！」

刹那、ラスレンは狼が動くよりも先に銀色に輝く長い棒を口に加え、息を吹き込んだ。長い棒から発せられた心地よい音色があたりに響き渡り、狼たちはすっかりそれに聞き入っている。

「狼たちが音楽に聞き入っている……」

「お姉ちゃん、今のうちだよ！」

「え？」

ミルは何のことだかわからずモアの顔を見下ろした。

「魔法だよ！ お姉ちゃんの攻撃魔法での狼たちをバーンっとやつけてよ！」

「で、でも何の魔法を使えばいいの？」

「何でもいいよ！ 今がチャンスなんだから！」

焦った表情で叫ぶモアにミルは自信なさげに頷いて、学校で習つた魔法を紡ぐ。しかし、狼たちの恐怖が頭から抜けないのかなかなか詠唱の言葉を紡げない。

（駄目、怖い！）

ミルはどうしても狼たちを見ることができない。いつの間にか、どこで買ったのかもわからないトンファーを振り回してラスレンと共に狼を追い払おうとするモア。持ち前のすばしこさで致命傷は避けられているが、それでも何度も傷を負う事だつてある。

（どうして、モアは狼さんたちに立ち向かっていくの？）

普通だつたら一匹出遭つただけでもすぐみあがつてしまつだらう。それなのに、ラスレンはともかく妹のモアは怯みながらも狼たちを必死に追い払おうとしている。受けたら痛い傷を負いながら……

結局ミルは魔法を一回も発動させることなく初の戦闘を終了した。

テントを襲撃した狼たちは一匹残らず一目散に退散していった。

「や、やつたあ…」

モアは万歳をしようと両腕を上げようとすると、がむしゃらにノンファーを振り回していたためか、両腕が激しく痛んだ。

「大丈夫!?」

自分に駆け寄る姉にモアは弱々しく「だいじょぶだいじょぶ」と微笑んだ。そんな一人の元にラスレンがゆっくりと歩み寄る。

「一人ともお疲れ様でした」

「ほんとに疲れたあ…」

「ラスレンさん、やつきの狼さんたちはどうして結界の中に入つて来れたんですか?」

「結界球は完全に魔物をシャットアウトするわけではないんですよ。結界を突き破つてくることもあるんですよ」

「怖い……」

ミルはボソッとつぶやいた。その一言を聞き逃さなかつたラスレンはやはりについつと「冒険家とは」ついう職業です」と微笑んだ。そしてさらににつつ続けた。

「引き返すなら今のうちですよ」

ミルは彼の笑顔の中に秘められた厳しい問いかけに答えられずにいた。

第11話

「ようこそ旅の方。」これはモールの町ですよ」

町の入り口にいる町人に案内され、三人はすぐに宿屋に直行した。まだ、朝も早いのだが狼たちの襲撃もあり、ミルとモアの体力は限界に近づいていた。

「では、僕は町で情報収集をしてきますので、ゆっくり休んでいてください」

ラスレンはあれだけの闘いを繰り広げて一夜明けた後だというのに、ケロッとした表情で宿屋の一部屋にミルとモアを残して外に出て行つた。

「はあ～」

ミルとモアは顔を見合わせるなり、ため息をついてベッドに寝転んだ。

「なんか、あたしたちが思つていたよりも厳しい道だね…」

「うん。足は痛いし、魔物さんがいっぱいいた…」

モールに来る道中も魔物との遭遇は絶えなかつた。ラスレンによれば、太陽が出た瞬間が魔物にとっての朝であり、太陽が沈んだ瞬間が夜なのである。すなわち、日の出の瞬間に魔物はこの広い平原を徘徊する存在となるのである。

「ラスレンさんの奏でる曲で追い払つてはもうついているものの、やっぱりまだ慣れないな、戦いは…」

「あたしも。もう両腕が上がらないよ…」

「自分の実力を試すことがこんなにも大変なことだなんて思わなかつたよ…」

「いやいや、これは別物でしょ。アル兄も手紙に書いてたけど、剣士同士の試合みたいなものがあるんだつてよ。お姉ちゃんの学校に

はないの？」

「ないよ。シユトレーン魔法学校はそんなに大きな学校じゃないから。仮に試合をしても負けちゃうよ」

「ふうん…」

モアはなんとも微妙な返答をすると、そのまま寝返りを打った。
「私たちがいなくなつて、お父さんたち探しているのかな…」

「と思うよ。ちょっと悪いことしたかな。せめて、手紙くらい残していけばよかつたかも…」

「うん……急にいなくなると、寂しいな」

「うん…」

ミルとモアはしづらべッドの上から窓の外を眺めていた。朝も早いせいか人通りはなく、店の準備をしている店主たちがちらほらと道を通りだけだった。一人しかいない宿屋の部屋はとても静かで、互いの息遣いだけが部屋に響くのみだった。

ミルはチラリとモアの顔を覗き見た。特に何かを考えているような顔ではないように見えたが、空を眺めているその瞳にはどこか物寂しげな感じがした。ふと、窓に移る自分の顔を見つめてみると、たして自分も隣にいる妹と同じような感情を瞳に秘めているのだろうか。

（でも、私は決めたんだよ。自分でアル君を迎えて行くって）

そうだ。旅はまだ始まつたばかり。草原を歩くことも、魔物と戦うことも全てが始まつたばかりなのだ。泣き言をいつのはまだ早い。

「そうだよね、アル君…」

第1-2話

「山越えですか？」

「ということになりますね」

ラスレンはミルとモアにも地図が見えるように地面に広げて見せた。

「現在こじるところがここ、モールです。ここから西に進むとモール山というのがあります。そんなに険しい山ではないので越えるのはさほど難しくないかと思います」

ラスレンは指で滑らかに今後の進路をたどつていいく。

「ねえねえラスレンさん、こっちのほうにも道はあるみたいだよ。何かこっちのほうが楽そうな感じがするなあ」

モアがラスレンの指しているところとは違つところを指で叩いた。地図上には暗闇の祠と記されている。確かに冒険慣れしていない彼女たちのことを考えると、暗いとはいへ平坦な道の続く洞窟のほうがいいかもしれない。

「残念ですがモアさん、この洞窟は先日落盤事故が起きたついで現在は通行できないそうなのですよ」

「えへ、そんなあ……」

先ほどまでのモアの嬉しそうな表情はあつという間に愕然としたものに早代わりをした。それをなだめるようにラスレンが「山も悪くないですよ」と慰めなのか、取り方によつてはいじめのよつなことを言つた。

「ここからはもう後戻りのできない旅になります。今一度確認しますが、決意は揺らぎませんか？」

ラスレンの問いに姉妹は顔を見合させて、そして何かを確かめるように小さく頷いた。

「もっちらん！」

「よろしくお願ひします、ラスレンさん」

モアは元気よく右手でピースを作り、ミルは一寧にラスレンに向かって頭を下げた。

「どうやら決意は固いようですね。では、お一人にはこれをプレゼントしましょう」

ラスレンは優しく微笑むと、袋の中から一本の杖とトンファーを出した。

「僕からの餞別です。同じ同業者としてね」

ミルは杖を取り、軽く構えてみる。

「知つてゐるとは思いますが、杖には魔法の力を高める効果があります。ミルさんへの武器はどれがいいか悩みましたが、弓矢や短剣といったものよりは扱い易く戦いの防げにもならないでしょ？」

「ありがとうございます」

「それでは出発します。今晚中にはモール山の麓くらいまでこは着いておきたいですからね」

モール山はモールの町から西に位置する山で、標高はそれほど高くなく初心者でも簡単に登れるくらい山というには少々お粗末な山だ。しかし、まだ冒険家に成りたての二人にとっては長旅の訓練としてちょうどよいだろ？。一日平原を歩き渡る時間を挟んで三人はモール山の麓にたどり着いた。

「さあ、いよいよ本番ですよ」

やる気満々のラスレンをよそに、ミルとモアは口をぽかんと開けながら麓から頂上を見上げていた。

「あの、ラスレンさん…」

「なんでしょう？」

ラスレンは至つて平然とした顔をしている。確かに冒険家として

年数を積んだラスレンには山登りというよりは丘歩きといえるのだろう。が、どう見てもミルの表情からは疑惑のまなざしが飛んでいた。

「このくらいの大きさの山なら普通ビーにでもあるよ。こんな山に登るのぉー？」

ミルよりも先にモアが文句の悲鳴を口にした。

標高が他の山ほど高くなるのは事実のようだが、どう見たって外見は普通の山だ。

「冒険家をしているとお一人の言つ普通の山は普通ではなくなります。むしろ、物足りないくらいですよ。僕はそれほど体力があるわけじゃないですが、このくらいの山は平氣で登りますよ？」

「モアちゃん、頑張るわ

仕方ないと言わんばかりの顔でミルはモアをなだめた。文句を言ったところで山道は優しくならないのだ。

「モール山は旅の行商人も通る山。そのため山道の整備はきちんとなされているようですから以外に楽な道のりですよ。まあ、実際に上って見ましょう。レツシチャレンジです」「

「そうですね」

「はあ、ゆーうつ…」

ミルは苦笑しながら、モアはため息をつきながらしぶしぶ足を動かしてモール山道を登り始めた。

ラスレンが言つたとおり、山道を登るのはそれほど苦ではなかつた。緩やかな道や、休憩地帯などの配備もされており、初めはブーリングを撒き散らしていたミルとモアの表情にも徐々に余裕が出てきた。時折聞こえる巨鳥の鳴き声と羽ばたく音にはまだビクツと肩を震わせるときはあるが。

朝から山を登り始めた三人は昼を過ぎた頃には無事にモール山を下山する道に入り、次の町へと向かう道をのんびりと、時には急ぎ足で歩いていくのだった。

モール山を下山したミル一行はネクシス大陸の食の玄関口と言わ
れているエクリールの港町を田指して今日もひたすら、時には魔物
と戦いながら歩いていた。

「そういえば……」

ふと思いついたようにミルがつぶやいたのはちよつと小川の流れ
る木陰で休憩をしていたときのことだった。

「どうしたのお姉ちゃん?」

簡易食のクラッカーを食べながらモアが聞き返す。

「エスパー、私たちが村にいなくなつてどうしてるかな……」

「あ、そういえば忘れてたね」

モアもしまつたと言わんばかりに口を押さえた。

「きつといつものようにアル君からの手紙を持つて帰つてくれ
てるはずなのに肝心の私がいなくて戸惑つているかも……」

「困つたねえ。ここから呼んでみるわけにも行かないし……」

ミルとモアの会話を聞いていたのかラスレンが微笑しながら「や
つてみてはどうですか?」とモアの意見を後押しする。

「鳥の耳は案外良いですから山一つ越えたくらいの距離なら聞こえ
るかもせませんよ?」

「ほんとに、ラスレンさん?」

モアが疑いの眼差しをラスレンに向ける。

「ほんとですよ」と少し慌てるラスレン。

「よお~し、やつてみるよ」

ミルはモール山のほうを向いて息を大きく吸い込んで山を越える
くらいの勢いで口笛を吹いた。いつもは優しい音色なのだが、大き
さに比重を置いたためか今日のは少し音がつぶれてしまった。しかし、エスパーならこのくらいの音のずれはものともせずやつてき
てくれた。ケティット村にいた時は、の話だが。

口笛がモール山にコダマしているのは遠耳に聞こえたが、果たしてケティットまで届いているのだろうか。ミルとモアは期待十分に山の向こうの空を眺めていた。しかし、十分くらい経つても鳥のシリエットすら見えなかつた。エスパールは小鳥だからこんなに遠くてはシリエットなど見えるはずもないのだが。

「来ませんね…」

「やっぱり遠すがるんだよ」

「……」

既に諦め越しのモアに対してもミルは最後まで強情だつた。エスパールはきっと来てくれる。ミルの中の何かがはつきりとう言つていた。そして、さらに十分が経過した。

このままずつと止まつてゐるわけにも行かないでのラスレンが先に進もうと提案を下した。それまでは頑張つて友が来るのを待つていたミルもよつやく諦めがついたのか小さく頷いた。そうして再びエクリールへの道を歩いていると、急に誰かに肩をつかまれたような感触に苛まれた。

「エスパール！？」

ミルの肩にはすっかり疲労しきつたエスパールが力なく立つっていた。

「この鳥がそうなのですか？」

ラスレンが今にもミルの肩から落ちそうなエスパールをそつと両手の中に寝かせる。両足にはいつもアルスに渡している手紙の入つた筒がしっかりと握られていた。

ミルは彼の足からそつと手紙の入つた筒を受け取ると、中身を確認した。

（アル君の字だ…）

何日ぶりに見る幼なじみの手紙に、ミルの目から小さな雨粒が落ちた。自分でもどうしてないのかわからなかつた。

手紙の内容に目を通してみる。

『ミル、それからモアも元氣にしているか？俺はいつものように剣

術に励む日常だけど、病気もしないで元気でいるよ。ミルは魔法学校のほうはどう? いつか、ミルのお父さんが許してくれたらモアも入れて三人で冒険がしてみたいな』

「冒険……」

「お姉ちゃん?」

「え? なんでもないよ。 そうだ、返事を書かなきや」

「慌ててはいけませんよ。 エクリールで宿屋に着いたら書きなさい」

「それから、筒の中にまだ手紙が入ってたよ」

モアが筒から取り出した手紙を渡す。ミルはてっきりアルスの手紙の二枚目かと思ったが、その内容は

「うわあ、お父さんカンカンだ…」

ミルの表情がたちまち恐怖に変わる。モアもミルから手紙を渡されてからすぐに顔を真っ青にして震えていた。

「この怒り方は今までにないかも…」

「うん……」

真っ青な表情で固まる一人に、ラスレンはすぐに一枚目の手紙が誰からのものなのかを察した。

「でもさあ…」

何か言葉をかけようとしていたラスレンのよそにモアが微笑した。同じようにミルも先ほどまでの恐怖はどうやらとこつた感じに笑つている。

「うん、そうだよね」

「はい?」

何が何だかわからないラスレンはどうしてもこの一人が笑つているのか不思議でしうがない。 やけになつて壊れたというわけでは毛頭ない。

「お父さんのバーカ。悔しかつたらこじまでおいでー」

「外には魔物がいっぱいいるけど追いつけるかなあー?」

一人は笑いながら手紙に向かつて父親を小馬鹿にしたようなことを言つている。

(この分なら心配はないですね)

父親の手紙に向かつて暴言を吐きまくる姉妹を見て、ラスレンは
後の始末が想像もつかないことになりそつだと苦い思いながらも、
なぜか笑みが絶えなかつた。

アルスはいつものように練習場で一人、稽古に励んでいた。

「せやつ！ でえい！」

木で作られた的是アルスの剣による連續攻撃で意図も簡単にバラバラになつて崩れ落ちた。 またやつちまつた、と心の中で思った瞬間にはもう遅かつた。 アルスは今月で三度目なのだ。

（まあ、材料はレアードマンドの森に採りに行けばいいから慣れたものだけ…）

いちいち教師のところに行つて器材を壊したことを報告に行くのが億劫なのだ。 熊は器材を壊したことに関しては馬鹿笑いで対処してくれるからありがたいのだが、一人やつかいな人物がいる。 そいつに会うのがたまらなく嫌なのだ。

今、アルスの足元に落ちている的もアルスがここに来たばかりの頃は強大な敵だった。 練習用の剣でいくら一撃を入れても木の丈夫さに負けて自分が吹き飛んでしまつて何度も泣きを見た。 しかし、それが今は木の丈夫さを乗り越えて簡単に斬ることができるようになつている。

（このくらいの力があれば、ミルを守つてやる」とくらじができるだろうか…）

アルスはふと自分の右手に視線を落とす。 每日剣を握つていると、慣れた今でも血豆くらいは当たり前にできる。 しかし、その痛みにももう慣れたものだつた。

（親父はどのくらい強かつたんだろう）

幼い頃にすぐレスミルスに剣の修行に出されたアルスには父親の強さを実証する記憶がそんなになかつた。 ここに来る前も週に何度も父親と剣の勝負も怒氣のよつなことをしていたことは覚えていられるのだが。

バサバサバサ。

「！？」

太陽を背にして一羽の鳥がアルスの肩にゅうくりと着地する。
「エスパールじゃないか。こんな朝早くに来るなんて初めてじゃないか？」

エスパールは喉を鳴らしながら自分の足元に視線を落とす。いつものように手紙の入った筒が握られている。

「今日はやけに早いな…」

前回、ミルへの返事を出してからまだ一週間ほどしか経っていないかった。最初の頃はほぼ一週間おきに届いたミルの手紙に対して、剣の修行の防げになるからとアルスが一ヶ月に一回にしてくれと要求したことがあった。

（もしかして村の誰かに何かあったのか？）

アルスは緊張した面持ちで筒を開き、中の手紙を読む。

『アル君へ。

驚かずにはいられない。今、私はラスレンさんという人と一緒にレスミールに向けて旅をしています』

（ふうん、あのミルが旅ねえ…）

「なにいーーー？」

アルスは思わず手紙に顔を近づけて今読んだ部分を繰り返した。
「レスミールに来るのか？しかもラスレンって誰だ？俺の知らない間にまさか…」

変な妄想が浮かんでくる。アルスはそうでないことを信じて、手紙の続きを読む。

『あ、誤解しないでね。ラスレンさんはたまたまケティットに訪れた旅人さんで私が無理矢理ついていつただけだから。それにモアちゃんも一緒だよ』

最初の一文でホッと安心はしたもの

「モアも一緒かよ…」

安堵のため息と落胆のため息が同時に吐き出された。

（しかし、なぜモアまで）

どういう心境の変化だろう、確かにモアは外で遊ぶのが大好きな女の子ではあつたが シグはさらに続きを読む。

『今、私たちはエクリールというネクシス大陸の食の玄関口と呼ばれる港町にいます。エスパールがアル君に手紙を届ける頃には私はどこにいるんだろうね。とっても気になります。アル君に会うまでに、私はどのくらい成長できるのかなあ。楽しみに待つてね』手紙を読み終えたアルスはしばらく放心状態になっていた。このまま心が外に放たれまま昇天してしまった。

「なんか、今年はとんでもない年になりそうだよ、エスパール…」苦笑しながらつぶやくアルスにエスパールは頑張れと言わんばかりに「口口口と喉を鳴らした。

港町エクリールはネクシス大陸の食の玄関口と言われている大きな市場のある港町で、ここに着船する船は全てが各大陸から運ばれてくる食料貨物用の船ばかりである。では、どうしてそんな港町に立ち寄ったのかというと、荷物運搬のついでに船に乗せてもらおうというラスレンの試みなのであった。モールで得た情報によると、旅客船のないエクリールにとつてはこれが普通のことなのだと。旅人たちも多く利用しているので冒険家だからという理由で毛嫌いはされないとのことだ。今日中に船に乗ることができれば、船の中が宿代わりともなるため宿代も浮くと一石二鳥な訳だ。

まずは軽く鮮魚店兼レストランでエクリールのシーフードを堪能した後、一行は船が停着している港へと向かう。

昼を過ぎ、ちょうど漁師たちは午後からの漁に出るところだつたため、残っているのは各大陸から集められた食べ物を乗せた船ばかりだ。この中からどの船を選ぶかも旅人の目の見せ所である。船頭や船員の対応や金銭面の交渉のしやすさ、船の速度等がこいつた場合の船を選ぶ条件である。

ラスレンは相変わらず穏やかな表情だが、その目は真剣に港に止まっている船と、その乗組員たちの動作や態度に注目していた。ミルとモアはそんなラスレンに続いて特に何も考えずに歩いている。まさかこれも冒険家にとつては重要な仕事であるなんてことには微塵も気づいていないだろう。

「この船にしますよ」

ラスレンは港を何度も行き来してようやく一隻の船を指差した。船の大きさは貨物用というだけあってそこそこの大さがあり、割とスペースもありそうである。

「すみません、ちょっといいですか？」

ラスレンは船の側で休憩している船頭らしき男に話しかけた。そ

して簡単に世間話をする。この時の船頭の対応はとても重要だ。幸い、船乗りらしいあつさりと気持ちがよく豪快な船頭だつたのでラ

スレンは「」で本題を切り出す。しかし……

「そいつはできない相談だなあ……」

船頭は氣まずそりて後ろ頭を搔く

「最近、この近辺で海賊がはひこつているらしいでな。俺たちも急遽予定を変更してネクシスの東側から回ってきたんだよ」

「から東側を回つて、おおむね北のへりで、シグリ

に着きますか?」

そこへさなあ、
たしたし三ヶ月はかかるかな」と

五百三十一

船頭の言葉は三川が悲鳴を上げた
ハバノ可愛い娘ニ哀ミソニハ

鼻の下を伸ばしたように船頭が顔の筋肉を緩ませた。ラスレンはそんな船頭に苦笑を見せながら後ろに立っているミルに理由を尋ねた。

「せめて一ヶ月後には、
間に合わせたいから……」

ミルは頬を赤く染めながら小さな声でつぶやいた。

の子なのに残念だったな」

「たぐでやよ。僕も涼して悪くないほどのと思いますがねえ……」
ラスレンが穏やかに笑いながらそう言つと、船頭も「俺も」と硬い筋肉をミルとモアに見せつけた。

結局どの船を回つても最初の船頭と同じ海賊の話題が上がり、海路を使っての旅はもろくも崩れ去つてしまつた。

「田中から『元気』
の石はどこがで『石をどり』
位方おに『せんれ』
つて歩きましょう」

「はい」

「あ～あ、せっかく楽ができると思ったのになあ」

船を使っての旅に相当な憧れを持っていたモアは心底残念そうに、宿屋につくまでラスレンにずっと愚痴っていた。しかしそれも食堂で新鮮な刺身を食べるまでのほんの数十分の間だけだつたが。

オム砂漠はエクリールから北に位置する小規模の砂漠である。エクリールからの船旅を断念せざるを得なくなつたミル一行は、そのオム砂漠を暑さに耐えながら渡り歩いていた。

「あ～つ～い～」

モアのこの台詞は砂漠に入つてからもう何百回田だらうか。最初は十分刻みに言つていたこの台詞も今では十秒おきのペースに早まつていてる。

「あついねえ…」

モアがそう言つ度にミルも彼女をなだめるように、または彼女に動搖するようになついねえと返すのもすっかり板についてきているようだつた。

「ラスレンはそんな服装で暑くないのあ…」

着ていた上着を脱いですっかり身軽になつたモアに対してラスレンはすつと当初の吟遊詩人の服装のままだつた。

「砂漠の暑さも慣れればそうでもないですよ。それよりもモアさん、あんまり肌を出していると太陽の熱で肌荒れしてしまいます。日射病や熱射病にもなりやすいですから上着は着ておいてください」

「え～！？し～ぬ～よ～」

モアはこの暑さにすっかりだれきつていた。ミルがそんなモアに上着を強引に着させる。

「モアちゃん、ファイトだよ」

「うう、あんまりファイトれないよ…」

「大丈夫ですよ。だいぶ進んできたのでそろそろオアシスがあるかと思います。そこで一休みしていきましょう」

「オアシス？」

聞きなれない言葉にミルが首を傾げる。

「砂漠に存在する水源地のことです。木陰もあつて涼しいところで

すよ。砂漠はもともと森が変化したものですからその一部がこういう形で残るんですね」

「なんだ」

「ほら、もう見えてきましたよ」

ラスレンが指す方向には小さい木々と、そこから所々青色が見えた。

「よし、やっと休めるわーー。」

さっきまでのだれ具合はどこへやらと言つた感じでモアはオアシスに向かつて一直線に走つていた。

「モアちゃん、元気だなあ……」

「ハハハ、でも彼女の元気さには時に僕も勇気をもらいますよ」
ラスレンは相変わらず優しく微笑みながらゆつくりとオアシスに向かつて歩を進めた。

「ヒヤツホー！」

オアシスに着くなり、ミルとモアはそのまま湖の中に飛び込んだ。

「フハー、気持ちいいねお姉ちゃん」

「うん。ラスレンさんも来ればいいのにね」

ミルとモアがオアシスに着いたらすぐに湖にダイブしたのに対してラスレンは今ものんびりと木陰に腰を下ろしてなにやらペンを動かしていた。そこはさすが吟遊詩人というべきか、それともただ単に年端も行かない少女と水に入ることに抵抗があるだけなのか。

それから間もなくして一人が水から上がってきたのだが、どこか慌てたような雰囲気があった。

「どうかしましたか？」

ラスレンはペンを草むらの上に置いて、ミルたちを見上げた。

「さつきチラつとですけど、人がいるのを見たんですね」

「人ですか？」

まさかとは思うが盗撮か？ラスレンはそう思つたが、こんな砂漠のど真ん中まで盗撮に来る者もいるまいとすぐに考えを改める。

「少し行ってみましょうか」

ラスレンはゆっくり腰を上げ、ミルたちが見たといつその場所まで案内を頼んだ。

その場所はちょうど湖の周りを半周歩いた辺りの草むらだった。その中にぐつたりと倒れている青年が一人。ラスレンはすぐさま彼の呼吸を調べた。

「ただの脱水症状です。僕らの荷物が置いてあるところまで連れて行って水を飲ませてあげましょ？」

ラスレンの一言に、ミルとモアはホッと安堵の息を漏らした。再び自分たちが荷物を置いた場所まで戻り、連れてきた青年に水を与えると、青年はすぐさま生気を取り戻した。

「いやあ、助かったよ。オアシスを見つけたのはいいけど、入った瞬間に力尽きちゃって」

青年は恥ずかしそうに笑つた。

「オム砂漠にはどうして來たんです？」

ラスレンの問いに青年は少し考えるような仕草をとつたり、しきりにミルとモアを見たりして、やがて何事もなかつたかのように「仕事を」とつぶやいた。

「オム砂漠にいるアントリオンという巨大蟻をしとめてダーウィンのギルドで報告すると割のいい報酬が出るんだな」
「なるほど。しかし、そんなことを我々に話してよかつたのですか？そんな情報を聞いては我々が横取りするとも限りませんよ」
「その心配はないさ。あんたみたいに女の子を連れて旅をしているような奴に倒せるわけがないぜ」
「もし倒せたら報酬は私たちが頂きますよ？」

「いいとも。やれるものならな！」

青年はそう言つと、自信たっぷりにオアシスを去つていった。

「感じ悪いね」

「うん」

ミルとモアはせっかく助けたのに、と言いたげな顔をしていた。
「せっかくのチャンスです。ミルさんとモアさんもだいぶ戦闘には慣れてきたことですし、ここはアントリオンを倒してあの人を驚かせてやりましょう」

「よおーし、やるぞー！」

ラスレンの言葉にモアはやる気満々に右手を空に振り上げた。
オアシスを出た三人はこのまま進むかいつたん来た道を戻るかについて話し合っていた。

「でも、さっきまでの道のりに蟻さんの魔物なんていなかつたよね？」

「ええ」

「ということはこっちだ！ 待つていろよ、アントリオーン！」

モアは回復したばかりの体力を全力投球して残り半分の距離のオム砂漠を走り始めた。

「もう、まだこっちだつて決まったわけじゃないのに…」

両手を腰に当ててつぶやくミルをラスレンは「まあまあ」となだめながら一行は次の町、アビ方面に向かつて砂漠を歩き出した。
このオム砂漠にいる魔物はほとんどが熱や日光に強い虫や熊ばかりで蟻がいるとは微塵にも思つていなかつた。

「蟻はどんなところでも生きる力を持っていますからね」

ラスレンは穏やかな笑みを浮かべてそう語る。

ズブ。音で表すとこんな音だつただろ？ いきなり前を走るモアの足が砂に取られた。

「危ない！」

ラスレンは急いでモアの足を砂から引き抜いた。刹那、突き破るように砂の中から大きな蟻が姿を現した。体の前部に鋭い一本の鎌のようなものを持った蟻、それがアントリオンだ。

三人はすぐに戦闘体勢に入る。ラスレンがまず得意の歌とハープでアントリオンの注意を引き付け、モアが持ち前のすばっしこで

敵の周囲をヒット＆アウェイで駆け抜けた。そして、ミルが唱えた水を操る魔法。

「スプライト・チーン！」

ミルの杖から現れたのは大量の水を鎖状に固めたリーチの長い鞭だった。それでアントリオンの後頭部を続けざまに五連打する。その間アントリオンは身動き一つできずに硬い体を丸めて縮こまっているだけだった。

「アイス・バースト！」

とどめは連續で放つたミルの魔法。上空で固めた冷気を破裂させて氷の粒を降らせる魔法だ。落下することで锐さを増した氷はアントリオンの硬い体を難なく貫いたのだ。

「やつたね！」

モアは止めをさしたミルに向かつて大きくブイサインをした。ミルも嬉しそうにブイサインを妹に返す。最初の頃は魔法を使つた後は戦闘の疲労もあいまつてブイサインなどできなかつたミルだったが、この頃はすこぶる順調である。

「これでいいんですね？」

ミルが確認のためにラスレンに聞くと、彼は「ええ」と優しく微笑んだ。

「後はダーウィンに報告に行くだけです。お一人ともお疲れ様でした」

「楽勝だよ、こんなの一！」

モアは得意気に胸を張つた。

「さあ、ではそんな元氣があるつちに砂漠を抜けてしまいましょうか」

「おー！」

ミルとモアはやる気満々に右手を空に振り上げるのだった。

ミルたちは今、切り立つた崖の上に立つ大きな屋敷の前に立っていた。

「村の人気が言つていた研究施設ってここなのかな？」

ミルは改めて崖の上に立つ屋敷を見上げた。外観は真下から浴びせられる塩を乗せた風にやられてすっかり寂れてしまい、屋敷の上のほうからはどこから生えてきたのか植物のつたも伸びている。

「間違いないでしょ。ここまでぼろぼろとは聞いていませんでしたが……」

「お化け屋敷みたいだね。ドキドキするなあ」

「私はお化け屋敷はちょっと…」

アビで屋敷の情報を聞いたときはミルのほうが楽しげにしていたのだが、いざその屋敷を目の当たりにしてすっかり気持ちが姉妹で逆転してしまったようだ。

「出るか出ないかは置いといて入つてみましようか。これだけ大きな屋敷なら魔法に関する書物の一冊くらいはあるでしょう」

ラスレンに言われ、ミルはため息をつきながらモアは顔をほころばせながら屋敷の重い門を開けて中へと進んでいった。

厳しい土地に立つ研究屋敷は内観もこれでもかといふくらいにぼろぼろに朽ち果てていた。屋敷全体を覆つている薄い霧に木でできた床は完全に腐り今にも床が抜けそうなくらいに柔らかい。所々穴が開いているのもきっとミルたち以前にここを訪れた冒険家たちが作ったものだらう。これでは研究屋敷というよりは本当にゴーストハウスと言つたほうが懸命なこの屋敷だが、見つけた書斎には数多くの種類の魔法所が無造作に並べられていた。

「すごい。古代魔法王国が全盛期の頃を記した本に、古代魔術の全貌、現代魔術の習得なんて本まである」

この部屋を見つけるまでは常に恐怖を顔に表していたミルだが、

書斎に入った途端、本にすがりつくように棚を散策し始めた。さらにラスレンまでもが興味のある本を見つけたのかすっかり釘付けになっていた。

そんなに面白いのかと本のページを一ページめくつてみると、モアには理解しがたい単語、文章、内容の三拍子がすぐにモアの読む気を消失させた。

「お姉ちゃんもラスレンもよくこんな字ばかりの本に夢中になれるなあ……」

ケティットにいた頃は学校にいる時間も含めてその大半を外で過ごしていたモアにはやはり読書の良さはよくわからないう�だつた。（少しでも知識を多く仕入れてレスミールの魔法学校に入学しなくちゃ。そして……）

ミルには夢があった。彼女はこの旅を志願した当時からレスミールを訪れてアルスに会うことだけを目的にしてはいなかつた。いつの日か、約束を果たすために一流魔法王国の魔術に触れて、アルスをサポートする魔導師になると。その為にはシユトレーン魔法学校だけの知識ではまったくもつて足りない。得られるだけの知識を今ここで吸収して少しでも試験の結果に貢献せなければならぬのだ。

数時間が経過してもミルは一向に休む気配がなかつた。ラスレンも流石に読み疲れたのか目の辺りを指で押さえながら休憩をしている。

「今日はここに泊まりですかね」

ラスレンの一言にモアがあからさまに嫌そうな顔をした。

「まあまあ、そんな顔をせずに。おそらく彼女には彼女なりの目的があるのでしよう」

「アル兄に会いにいくだけじゃないの？」

「 さあ、どうでしょ、」「う

ラスレンは意味深な笑みを浮かべると、席を立つた。

「 さあ、我々は夕飯の準備でもしておきましょ。まずは食所を探さなくてはね」

「 はあ～い…」

モアはげんなりとした表情でラスレンの後をのろのろといつた。

「エスパー、これをお願いね」
ミルはいつものように手紙の入った筒をエスパーの両足にしつかりと握らせると、その両手の中から彼を優しく空に放した。

「ミルさん、そろそろ出発しますよ」

向こうでテントを片付けているラスレンに声をかけられ、ミルはエスパーが飛び去つていった空から田を離した。

「今日は少し予定を変更します」

昨日の野営地から出発するなりラスレンは穏やかな笑みを浮かべながら言った。

「本来ならこのままアビを北に進みダーウェンに向かつ森へと入つていいくのですが、その途中のわき道に洞窟があるということなのでそこに向かいます」

「何か目的があるんですか?」

ミルの問いにラスレンは「いいえ」と首を振った。

「ただ、そろそろ僕たちがケティットを旅立つてから一ヶ月が経ちます。貴方たちの冒険家としての力量も上がってきたのでここらで少し腕試しをしてみてはと思っていましてね」

「腕試し……?」

「洞窟というのは冒険家にとつては基本的なダンジョンの一つです。その中は道が枝分かれしていたり仕掛けを解いたりとバリエーションが様々です。もちろん魔物も出てきます」

「そう言えば、これまでの旅で洞窟には入つたことがなかったね。冒険家といえば洞窟だと思っていたからね」

「でも、とても面白そう」

「決まりですね。まあ、お一人がもし嫌だと言つても縄をつけてでも行くつもりでしたががね」

「うひゃあ……」

「ラスレンって意外とそつちの属性の人だつたんだねえ」
モアの一言にラスレンは「うー想像におまかせしますよ」とやはり
優しい笑みを浮かべるだけだつた。

アビの北西 ネクシア大陸の最西端は
その洞窟には、かにと口を開いてミルとモアの到着を待っていた。

「明かりは……ないみたいだね」

「じゃあ、ランプを使おうか」

「ミルは袋からランプを取り出すと、炎の魔法で火をつけた。
やつぱつ二つ持て魔法を使えるのは便利だな」

「うん」

「じゃあ準備もで

ミルとモアはやる気十分に右手を空に向かって振り上げた。ランプを持つているモアを先頭に三人は洞窟の奥へと入つていつ

た。独特の湿っぽさと蝙蝠系の魔物が多いことはいかにも洞窟といった感じだ。しかし、ケティットから旅を始めて一ヶ月になるミルとモアにどつてはもはやこの湿っぽさも、蝙蝠の羽音も気にならなかつた。やがて三人は初めての分かれ道に遭遇する。

「道が分かれていくね」「どっちが正解なのかな?」

「私はまだヒョウのま

「あたしは左だと思つて」

一人の視線が後ろに立っているラスレンに向かられる。ラスレン

はやつぱつと言わんばかりに両者からの視線を浴びた。

「僕は三川さんは賛同します ますは
やつたあ。ありがとうございます」

「ちえ、ラスレンつたらお姉ちゃんに弱いんだからさ」

喜ぶニルとは逆にモアは可愛らしく頬を膨らませる。レーハーのア

「もし右の道が分かっていても大丈夫ですよ。ちゃんとこの洞窟の
クシテントも女性一人と旅をする男の権限といえるだろう。

道は記録してありますから」

ラスレンは詩を書くときのノートを一ページ割いてそこに今まで通ってきた道を記していた。

その後も三人は順調に洞窟探検を行い、洞窟に入つて三、四時間もする頃には全ての道が記された一枚の洞窟の全体図が出来上がつていた。

「ここで行き止まりだね」

「これで通ってきた道は全てですね」

ラスレンはノートに行き止まりを示す印を記入すると、ミルとモアにも確認のためにそのノートを見せた。

「な~んか物足りなつたなあ」

洞窟の出口に向かつて進みながらモアがつまらなさそりにしぶやいた。

「どうして?」

「だつてさ、洞窟といえばもつと宝箱とか置いてあつて、つよい敵がいたりするものだと思つていたから拍子抜けしちやつた」

「確かに一般に伝わつている洞窟のイメージはそうでしょうね。しかし、実際はこんな感じの洞窟が多いですよ。トラップとか分かれ道とかも全て自然にできたものです。宝箱が置いてある洞窟は大抵がこのような自然の洞窟に人が手を加えた所謂人工洞窟です」

「そなんだあ」

「天然の遺跡や洞窟はソグリアテス大陸に多く点在すると聞きますね。ネクシスはほとんどが人工洞窟です」

「あたし、一度でいいから宝箱を取つてみたかつたなあ……」

「いいじゃないモアちゃん。分かれ道やトラップはいっぱいあつたんだから」

なだめるようにミルは微笑んだ。

「まあね。途中、ひどい目に遭つたからね」

「それもまた一つの思い出ですよ。いい経験になりましたね」

「……そうだね。今回はこれでもいいか」

ようやくモアの気が晴れてきたところで洞窟の出口が見えてきた。外に出ると、空はすっかり星が輝く夜の世界に変わり果てていて、ミルとモアの日を奪つた。

「明日も晴れだね、きっと」

満天の星空を仰ぎながらミルは優しくわざわざやくのだった。

緑鮮やかな綺麗な森。木々の隙間から見える太陽は木の葉を受けて一層神秘的な色合いを秘めている。

小鳥のさえずりがあちこちから聞こえてきて森に入る者の気持ちを安らぎへと導く。

ミルたちはそんなネクシス大陸で最も大きな森に入っていた。ただ、これだけ神秘的な森なのに名前が『深い森』なのには訳があった。森に入つたら最後、入つた者は一生太陽の下に出ることができないという不気味な森なのだ。そして、一行も例外なく森の悪戯によつて森の中をさまよい続けていた。

最初は森の神秘に心躍らせ、ついでに視線も躍らせていたミルとモアも一週間この森の中を歩いているせいが、そんな気力は完全に失せていた。

「ラスレンさん、これ…」

ミルが見つけたのは木につけられたナイフの傷跡。木には既に三つほど傷が横に軽く刻まれていた。

「また同じところのようですね」

今回ばかりはラスレンも微笑を忘れて険しい表情で木につけられた傷をため息を吐きながら見つめる。

「何なのこれえ！何でおんなじところをぐるぐる回つてばかりなお！？」

まだ歩き始めて間もないというのにモアのつかれは最骨頂に達していた。それだけ精神的疲労のほうが大きいのだ。

「最初、この森の情報を聞いたときは単に森の規模のことかと思つていましたが、どうやらそれだけではなかつたようですね。この罷こそがこの森が『深い森』と呼ばれる最大の理由……」

「つまり謎を解かないと出られないということですか？」

「おそらくはそうでしょう。しかし、謎を解こうにもこう木々に阻

まれてはどこに仕掛けがあるのかもわかりません

「そんな、あたしここで死にたくないよ！」

モアが目に涙を溜めながら叫ぶ。そんな彼女を見ているとなぜだかミルまで涙が頬を伝つていく。アルスの笑つた顔、怒つた顔が次々と頭の中に浮かんでくる。

「森さん、聞いてください！私たちはただ、ソグリアテス大陸にいる幼なじみに会いに行くためにここを通り抜けようとしただけなんです！何も悪いことをしようなんて思つてません！だから、早くここから出してください！」

気がついたらミルは物言わぬ森に對してそう叫んでいた。なんと氣の触れた行為だろうと思うだろう。しかし、人間というのは追い詰められると自然にすら命乞いを始めようと考えるのだ。

ミルが大声を張り上げたことで森を住処にしている小鳥たちが一斉に騒ぎ始める。

「な、なに！？」

モアもハッと顔を上げる。小鳥達のざわめきはやがて、一人の幽靈を呼び出してしまつていた。

足のないその存在にラスレンすらも言葉を忘れて呆然とその場に立ち尽くすだけだった。

『貴方の言葉、それは本当のかしら？』

美しい女性の姿をした幽靈はあるドミルたちの心に話しかけてくるようだった。

『答えて…』

「は、はい。私たちはレスミールにいる幼なじみに会いに行きたいだけなんです！」

『……』

幽靈の女性はしばらくそのまま三人の前に立ち去つていていたが、やがてふと閉じていた瞳を開いた。

『貴方の幼なじみが見えたわ。どうやら本当のようね』

そして幽靈はすまなさそうに「いめんなさい」と頭を下げた。

『「Jの森は冒険家たちの間でも噂になっているからもう誰も来ないと思っていたの。そしたら貴方が入ってきたから。皆を守るためにこうして貴方たちの体力を奪つていこうと思つたのよ』

「皆を守る?」

聞き返したミルに幽靈は小さく頷いた。

『私も昔は冒険家だつたんだけど、この森で命を落としてね。幽靈になつて行き場のなかつた私をこの森の動物達が拾つてくれて一緒に暮らしていたの。以来、そのお礼として彼らを守るうつこの森に結界を張つたの』

「それが、入つた者を迷わせる罠だつたんですね?」

ラスレンの言葉に幽靈は小さく頷いた。

「幽靈さんはそれほどこの森に感謝しているんだ」

幽靈は微笑を浮かべながら小さく頷いた。

「でも、Jで死んだんでしょう?この森が憎いって思わなかつたの?」

『「ううん。貴方たちも冒険家ならわかると思うけど、死は自分の油断から招くもの。この森で私が死んだのは私に力がなかつたから。自分の慢心と油断のせいだもの。この森は何も悪くない。なのに、この森は私を救つてくれた。これでどうして憎いなんて言える?』

「…貴方は強い人ですね。わかっていてもなかなかそつは思えないものですよ?」

『「ありがとう。さあ、森の結界を解除したわ。Jのまま真つ直ぐ行くところの森を出られるわ』

「ありがとう、幽靈さん!」

『早く幼なじみに会えるといいわね』

「うん!」

ミルは大きく頷いた。

森を出た三人はダーウェンに向かう道を歩いていた。

「何か変な体験だつたね」

「うん。でも、とってもいい人だつたよ」

「彼女にとって、あの森はとても居心地のよい場所なのでしょうね。三人はもう一度、後ろ降り返つた。森は夕方の太陽の光を浴びて鮮やかなオレンジ色に染まつていった。

「また来たいね」

寂しそうにつぶやくミルにラスレンの手がそつと彼女の肩の上に乗せられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0040b/>

思い描くあの頃へ

2010年10月18日15時49分発行